

初級&3級 発心教材 概要 (H29. 8. 24 現在)

No	タイトル	内 容	出題形式
①	立正安国論(1)	背景・大意	空欄補充
②	立正安国論(2)	第41・42章	空欄補充・語訳
③	立正安国論(3)	第46・47章	同上
④	佐渡御書	2月度御書講義	同上
⑤	法華経(1)	前 編	空欄補充
⑥	法華経(2)	後 編	同上
⑦	教学講釈(1)	一念三千	同上
⑧	教学講釈(2)	御本尊の相貌	同上
⑨	教学講釈(3)	妙法弘通の肝要	同上
⑩	教学講釈(4)	日顕宗を破す	同上
参考資料	法華経の構成と概要		2017.8.8 聖教新聞掲載
参考資料	2月度「御書講義」の参考		2017.2.18 聖教新聞掲載
参考資料	「六難九易」(宝塔品第11)		現代語訳
参考資料	「三類の強敵」(勸持品第13)		現代語訳

9月 教学部初級試験 青年部試験 3級を実施

「教学部初級試験・青年部試験3級」が、9月に全国で開催される。

受験対象は、助師・講師。両試験は同一の問題で、今回からマーク方式で実施される。「御書根本」の実践こそ、創価の善いある伝統である。

戸田城聖先生は語った。「疲れた時にこそ、御書を拝読していけ、たとえ一行でも二行でもよい。御書を拝読して、自らの魂を心肝に染める絶好の機会となろう。大綱は次の通り。

【日時】
9月24日(日)
① 午前1時30分～2時30分
② 午後7時30分～8時30分

※昼の受験を原則とする。仕事等の理由により、ても昼の受験が難しい場合は、特別として夜の受験ができる。

【受験資格】
①受験申し込みの締め切り時点で、会員で教学部助師の人(講師の人も含む)。

ただし、会友ならびに未来部員の受験については行わない。

②座談会・御書学習会等、日常の会合に参加している人。

※以上の条件を満たし、かつ本人が受験を希望すること。受験資格については、支部長が承認し、受験カードに押印する。高齢の人、妊産婦、病弱な人については、無理をしないよう注意してください。

【受験申し込み】
6月1日(木)から7月22日(土)まで。

※申し込み期間に本人自筆の受験カードを、所属の支部長に提出し、申し込み。締め切り後の申し込みは受け付けません。また、地域によって申し込み期間が異なる場合がありますので、地元組織にご確認ください。

【出題範囲】
①「立正安国論」第9・10段(31～33頁、34～35頁)
②「佐渡御書」(本年2月度の御書講義範囲、92ページ12行目)
③「教学入門」
④「教入門」第2部および「世界広布と創価学会」から「日顕宗破折の内容を含む」

【教学講座】
「教学部初級試験・青年部試験3級」に関する「教学講座」は、SOKAチャンネルVODの番組として配信します。VODが利用できる会館や、SOKAチャンネル、モバイルSTBで視聴可能。インターネットを通じてダウンロードが必要。創価学会公式ホームページ「SOKAネット」のコンテンツでも配信予定。配信期間等の詳細は決定次第、お知らせします。

※出題範囲の全の解説が、「大白蓮華」6月号(5月下旬に配達)に掲載。205円(税込み)配達を希望する場合は、4月20日までにお近くの聖教新聞販売店にお申し込みください。

SOKAオンラインストア

アでは4月25日から予約を受け付けます。コンビニ通販サイト「セブンネットショッピング」・「ローチケH MV(ローリングストーン)」での注文、受け取りもできます。一般書店での注文・購入も可能です。

また、電子書籍としても購入できます。希望小売価格185円(税込み)。配信日は各電子書店によって異なります。

『立正安国論』が執筆された背景と本抄の大意について述べた、次の文中の□にあてはまる言葉を答えなさい。

本抄は、日蓮大聖人が**文應元年**（1260年）**7月16日**、39歳の時、当時の最高権力者に対して、「**諫め曉す**」（相手の誤りを指摘して迷妄を開き、正しい道に導く）ために提出された「**国主諫曉の書**」である。

当時の鎌倉幕府の実質的な最高権力者は、重病を機に執権職を子・**時宗**に譲り、出家して最明寺入道と呼ばれていた、得宗（北条一家一族の統括者）の**北条時頼**である。

当時は、大地震・大風・洪水などの自然災害が相次ぎ、深刻な飢饉を招き、加えて疫病の流行などが毎年のように続き、人心は乱れ、民衆は苦悩の底にあった。

『立正安国論奥書』に、「正嘉元年太歳丁巳八月二十三日戊亥の尅（午後9時前後の大地震を見て考えた）」（御書33頁 通解）とあるように、正嘉元年（1257年）8月に**鎌倉** 一帯を襲った「**正嘉の大地震**」が、本抄を執筆された直接の動機である。

この大地震は前代に例を見ない被害をもたらした。山は崩れ、家屋は倒壊し、地が裂け、火災が噴き出したという※記録が残っている。（※ 鎌倉時代の歴史書『吾妻鏡』→現代語訳 立正安国論115頁参照）

このような民衆の苦悩を目の当たりにされた大聖人は、災難を止めて民衆を救う道を探求され、誤った**謗法**の教えに人々が帰依するのを止め、**正法**を人々の心と社会の支柱として打ち立てる以外にないことを深く確信されて、「立正安国論」を著し、**北条時頼**の側近である宿屋光則を介して、本抄を提出されたのである。

本抄の題号である「立正安国」とは、「**正を立て**」、「**国を安んず**」と読む。

「**立正**」は安国の根本条件であり、「**安国**」は立正の根本目的である。

「**立正**」とは「**正法**を立てる」、つまり**正法**の流布であり、**正法**とは、「**実乗の一善**」すなわち、すべての人々が**仏性**という根源の力を開いて**成仏**できると説く**法華経**の法理である。

また、「**立正**」とは、**破邪顕正**でもある。**法華経**の万人成仏・万人平等の精神に反する教えは、人間の絆の分断をもたらす主義・思想であり、そうした「民衆蔑視」の教えは次第に人々の心に浸食し、活力を奪っていく。この「**悪**」を打ち破る対話によって人々の生命の根源的な迷いである**無明**を打ち払い、**正法**を社会に確立することが肝要である。

「**立正**」の目的である「**安国**」とは、社会の繁栄と世界の平和にほかならない。日蓮大聖人が示された「安国」の「国」とは、単に権力者を中心者とする体制としての「国家」ではなく、民衆が生活を営む場である「**国土**」を指しているのである。

日蓮大聖人の御生涯にわたる御行動は、「**立正安国論**」に始まり、**立正安国論**に終わる」といわれる。

「**立正安国論**」の提出を契機に、大聖人に対する幕府や既成の宗教勢力からの迫害が本格化する。

幕府は大聖人の諫曉に対して、御書に「お尋ねも採用もなかった」（御書335頁 通解）など仰せのように、結果的に黙殺の態度をとるのであった。**法然**の**念仏**を強く破折する「**立正安国論**」の提出からほどなく、念仏者たちが大聖人の草庵を襲う**松ヶ谷の法難**が起り、翌・**弘長元年**（1261年）5月には、幕府によって**伊豆流罪**に処された。

さらに、**文永元年**（1264年）11月には、故郷・安房で、地頭・**東条影信**の手勢に襲撃され、同行の門下の中に死者が出た上、大聖人御自身も額に傷を負い、左手を折られた**小松原の法難**が起る。

このように、命の危険にも度々さらされる迫害を受けられても、大聖人の**立正安国**の精神と行動が揺らぐことはなかった。

文永5年、大聖人は、蒙古からの国書が到来したことをいち早く知り、2度目の諫曉の書となる「**安国論御勸出来**」を執筆される。「**立正安国論**」を執筆・提出した意義を自ら解説し、**謗法** 禁断を改めて訴えられている。

また、同年には、時の執権 **北条時頼**の子である**時宗**や**平左衛門尉頼綱**ら幕府の要人、**極楽寺良観**ら鎌倉の諸大寺の僧ら、あわせて※11カ所に書状を送り、公場対決を迫られた。（※「十一通御書」）

その毅然たる大聖人のお振る舞いに対し、諸宗の高僧は讒言によって幕府を動かし、**文永8年**の**竜口の法難**・**佐渡流罪**へとつながっていくのである。

本抄は、客（**北条時頼**を想定）と主人（**日蓮大聖人**を想定）との十問九答の問答形式で展開される。相次ぐ災難を嘆く**客**に対し**主人**は、**経典**に基づき答え、正しい人生と社会の在り方を教え、その実現を促していく。

まず、客の災難への嘆きに対して、主人は共感しながらも、人々が**正法**に背き**悪法**を信じている「**謗法**」「こそ災いの原因であると述べ、災厄の元凶として、**法然**の**専修念仏**を強く破折する。**法然**は『**選択集**』で、念仏が抛り処とする**阿弥陀仏**と**浄土三部経**を除いて、釈尊を含めるあらゆる仏神と法華経を含む諸経をすべて「**捨閉闍地**」するよう

に主張しているからである。だが、この**専修念仏**は、世俗の権力者の帰依を受けるばかりか、**法華経**の信仰を宣揚すべき**天台宗**の高僧などに宗教的権威の容認を得て、幅広く人々の信仰を集め、隆盛を誇っていた。それゆえ、主人は

謗法の**念仏**の禁断を強く促している。さらに、このまま謗法の教えに執着し続けるなら、経典に説かれる諸難のうち、まだ起こっていない難が起ることを警告するのである。

次の文は、「第41章」(31頁1行目～6行目)の現代語訳の一部です。これについて、あとの問いに答えなさい。

仏の教えはこのようにさまざまに分かれていて、その趣旨をすべて知ることは難しく、不審は多岐にわたって 何が正しいのかは明らかではない。とはいえ、法然聖人の『選択集』は目の前にある。仏たち・諸経典・菩薩たち・神々などに対して **捨開** 闡抛 という四字をその上に置いている。その文は明らかである。

「これが原因で、 **聖人国を去り** **善神所を捨てて** しまつて、天下は飢えと渇きに苦しみ、世の中には疫病がはやって すみやかに **一闡提への施を止め 永く衆僧尼の供を致し**、

仏の海の白浪(盗賊)を静かにさせ、法の山の緑林(盗賊)を取り除くなら、世の中は義農の時代のような平和な世となり、国は唐虞が治めるような安穏な国となるだろう。

問一 にあてはまる文を、御文で答えなさい。

問二 傍線イについて、説明しなさい。

捨てよ、閉じよ、闡(さしお)け、抛(なげう)ての意。

「第42章」(31頁7行目～18行目)について、あとの問いに答えなさい。

問三 この章の初めの四つの譬えについて、それぞれ説明しなさい。

(一)「鳩化して鷹と為り 雀変じて蛤と為る」(31頁7行目)

謗法の対治を誓った客の大きな変化のこと。

(二)「蘭室の友に交りて」(31頁7行目)

香のの高い蘭がある部屋に物を保管する、その香りが自然と移ること。

(三)「麻畝の性と成る」(31頁7行目)

曲がって育つ蓬(よもぎ)が、麻畝麻畑では麻に従って真っ直ぐに育つように、仏法に対する曲がった客の心が、主人の正しい道理に従って真っ直ぐになったことのこと。

(四)「水中の月の波に動き 陳前の軍の剣に靡くがごとし」(31頁9行目)

今、決意を燃やしている客も、すべてその決意も揺らぎ忘れてしまった。このように縁に紛動され移つていやすのが、人の心の常である。

問四 次の現代語訳の文について、(一)～(三)の問いにそれぞれ答えなさい。

葉王経の七難のうち、五難は現に起こり、二難はまだ残っている。すなわち **A・B** である。大集経の三災のうち、二災はすでに出現し、一災がまだ起こっていない。すなわち、 **C** である。
金光明経のうちの種々の災禍はそれぞれ起こっているが、**外部の敵対者が国内を侵略する**という災難はまだ現れていない。仁王経の七難のうち、六難は今盛んであるが、一難はまだ現れていない。すなわち、**四方の外敵がやって来て国を侵す**という難である。

それだけでなく「**国土** が乱れるような時にはまず **鬼神** が乱れる。 **鬼神** が乱れるので **万民** が乱れる」とある。(御書 31頁 11行目～14行目)

(一) にあてはまる言葉を、御文の言葉でそれぞれ答えなさい。

(二) **A・B** にあてはまる難をそれぞれ答えなさい。また、傍線ハはどちらの難かを答えなさい。

A Ⅱ **他国侵逼 難** **B** Ⅱ **自界叛逆 難** 傍線ハ Ⅱ **他国侵逼 難**

(三) 傍線ロについて答えなさい。また、 **C** にあてはまる災を答えなさい。

傍線ロ Ⅱ **穀實 の災** **疫病 の災** **C** Ⅱ **兵革 の災**

「第46章」(32頁13行目～17行目)の御文について、あとの問いに答えなさい。

広く衆経を披きたるに専ら謗法を重んず、悲いかな皆正法の門を出でて深く、**イ**邪法の獄に入る、愚なるかな各悪教の綱に懸つて鎮に謗教の綱に纏る、**ロ**此の朦霧の迷、**ハ**彼の盛焰の底に沈む豈愁えざらんや豈苦まざらんや、汝早く信仰の寸心を改めて速に**ニ**「実乗の一善」に帰せよ、然れば則ち**ホ**三界は**ヘ**皆仏国なり仏国其れ衰んや十方は悉く宝土なり宝土何ぞ壊れんや、国に衰微無く土に破壊無んば身は是れ安全、心は是れ禪定ならん、此の詞此の言信ず可く崇む可し。

問一 傍線**イ**について、次の文の にあてはまる言葉を答えなさい。

人々は **死** への不安があるからこそ、慰めを求めて、 **念仏** を信じるのである。しかし、どんなに **安心** を求めても **今世** では得られないと諦め、 **来世** に救われるのをただ待っだけの無気力に陥ったり、 **阿弥陀** の慈悲によつて救われるから自身の **努力** は関係ないと放縦にはまったりするのが、 **念仏** である。

問二 傍線**ロ・ハ・ニ・ホ**について、それぞれ具体的に説明しなさい。

ロ 現世における仏法の正邪への迷いを、濃く立ち込める霧に譬えている。

ハ 死後に堕ちる無間地獄の苦しみを、焦熱の火炎で示している。

ニ 法華経の文底の妙法である南無妙法蓮華経。

ホ 欲界へ欲望にとらわれた衆生が住む世界へ色界欲望からは離れたが、物質的な制約がある衆生が住む世界へ無色界欲望も物質的な制約も離れた、高度に精神的な世界へからなる、地獄から天界までの六道の迷いの衆生が住む世界。

問三 次の にあてはまる御文を答えなさい。

立正 — 破邪 — 信仰の寸心を改めて
顕正 — 実乗の一善に帰せよ

安国 — 仏国

問四 傍線**ヘ**について、次の文の にあてはまる言葉を、 にあてはまる御文を、それぞれ答えなさい。

仏法 の精神が脈々と貫かれている社会は、個人が自立の生命力を得て、 **生命** を何より尊重していく生命尊厳と自他共の **幸福** の実現という思想が重んじられるがゆえに、悲惨な **災難** や **争乱** の連鎖を解決できる社会なのである。すなわち、一人一人が尊極の人間として振る舞う社会に衰亡はないのである。これが **仏国** である。
また、自然環境全体・宇宙全体が生きてし生けるものに豊かな恵みをもたらしてくれる世界、つまり、人間同士、人間と自然との豊かな調和と創造を支え生み出す根源の一法こそ、宇宙と **生命** を貫く **南無妙法蓮華経** なのである。
だからこそ、このような世界である **宝土** もまた壊れることがないのである。その結果として得られる **幸福** に満ちた安心立命の境涯は、単に何もない平穏な状態の中で安住することではなく、人々の **幸福**、**平和** の社会を建設するために、どんな **困難** にもひるまずに戦っている心、強靱な精神こそが **禅定** なのである。

次の文は、「第47章」(32頁18行目～33頁4行目)の現代語訳です。これについて、あとの問いに答えなさい。

これらの経文に目を通して詳しく仏の言葉を承てみると、誹謗の罪は極めて重く、法を謗る罪は実に深い。私(客)は **阿弥陀仏** だけを信じて諸仏を抛ち、**イ**浄土の三部経を仰いで諸経を聞いたのは、自分勝手な思いからではなく、**ロ**先達の言葉に従っただけである。全国の人々もまた同様である。今世には仏性をそなえている心を消耗させ、来世には **阿鼻** に落ちてしまうことは、経文に明らかであり法理は行き届いている。疑うことはできない。へ中略へただ私だけが信じるのではなく、それに加えて、他の人の誤りをも制止していこう。

問五 にあてはまる文を、御文で答えなさい。

問六 傍線**イ・ロ・ハ**について、それぞれ具体的に説明しなさい。

イ 無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経の三経をいう。

ロ 法然を指す。

ハ 自他共の幸福という「立正安国」の本義を知り、その「**イ**」が自身の使命の自覚と誓いへと昇華していった時、その誓いは、自身の境涯を大きく広げ、人々に正法を語り広げていく原動力となる。「立正」とは「安国」が達成されるまで、**ロ**でも貫いていく不撓不屈の行動である。

問一 次の文は、本抄の背景と大意について述べています。これについて、(一)・(二)の問いにそれぞれ答えなさい。

本抄は、**文永9年**（1272年）3月、日蓮大聖人が51歳の時、**佐渡**から門下一同に与えられたお手紙である。

前年の「**竜の口**の法難」以降、迫害の手は大聖人だけでなく門下にも及び、弟子たちは投獄・所領没収などに処される。

その中で、「大聖人が**法華經の行者**であるなら、なぜ大難に遭うのか」等の疑念を抱き、厳しい迫害を恐れて退転する者が続出したのである。難に動揺する弟子たちを案じられた大聖人は、先に、大聖人御自身が**末法の御本仏**であることを示された「**開目抄**」を門下一同に送っている。

また、この2月には「二月騒動（北条時輔の乱）」が起き、これは「**立正安国論**」で予言された「**自界叛逆難**」の的中したのである。本抄は、その知らせを受けて著されたものであり、「**開目抄**」の趣旨を要約して示された御抄とも拝されるのである。

本抄において、人間にとつて無上の宝である生命を仏法にささげれば、必ず**仏**になれると教えられ、その実践は時代によつて異なることを示されている。特に、悪王と悪僧が結託して、正法の行者を迫害する**末法**においては、「**師子王の心**」で悪と戦い抜く人が必ず**仏**になる、と述べられている。

また、「**自界叛逆難**」の的中という厳然たる事実から、大聖人こそ日本人々にとつて「**主師親の三徳**」を具えた存在であり、大聖人を迫害する者が滅亡の報いを受けるのは、「**法華經**」の經文に照らして明らかであると断言されている。

さらに、御自身の法難の意味を洞察され、法難を受けることによって、過去世からの**罪業**を滅することができるといふ、**宿命転換**の原理を示されている。そして、大聖人に対する**退転者**の、愚かな批判を一蹴されるとともに、彼らが**念仏者**よりも長く**無間地獄**に堕ちると、弟子を厳しく戒められ、本抄を結ばれているのである。

(一) にあてはまる言葉を答えなさい。

(二) 傍線にあてはまる言葉を、漢字四字で答えなさい。

不惜身命

問二 次の御文ついて、(一)～(四)の問いにそれぞれ答えなさい。

畜生の心は**弱き**をおどし**強き**をおそる当世の学者等は**畜生**の如し**智者**の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり**強敵**を伏して始て力士をしる。

悪王の**正法**を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は

A

例せば**日蓮**が如し。

これおこれるにはあらず**正法**を惜む心の強盛なるべしおこれる者は必ず**強敵**に値ておそる心出来するなり例せば

修羅のおごり**帝釈**にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し。

正法は一字一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし千經万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず。

(一) にあてはまる言葉を答えなさい。

(二) A にあてはまる御文を答えなさい。

師子王の如くなる心をもてる者必ず**仏**になるべし

(三) 傍線Iについて、次の文の にあてはまる言葉を答えなさい。

この御文の前段において、**釈尊**の**過去世**の姿で、仏法のために大切な自身の身命をささげたことを通して、

不惜身命こそが仏道修行を成就させる**成仏**の肝要であると仰せである。

ここである「**不惜身命**」とは、決して命を粗末にすることではなく、**全生命**を懸ける覚悟で真剣に信心に励んでいくことなのであり、「大事の**仏法**」のために**身命**をささげてこそ、**仏**になることができると強調されている。

(四) 傍線IIについて、 にはあてはまる言葉を、 にはあてはまる御文を、それぞれ答えなさい。

この御文の前段において、「**仏法は授受・折伏時によるべし**」と仰せである。「**授受**」は、人々の機根に合わせて法を

説いていくことであり、「**折伏**」は、極理の**南無妙法蓮華經**を説き切っていくことである。

末法では、**折伏**こそ時に適った実践である。大聖人は、**末法**において**法華經**を流布すれば、**釈尊**在世よりも激しい**怨嫉**が起こり、**大難**が競い起こることを教えられているのである。

法華の
教学試験発心教材⑤ / 法華経（前篇） 解答例
へ平成29年度 教学部初級試験・青年部教学試験3級 対応版

『法華経』について述べた次の文中の□にあてはまる言葉を書きなさい。

仏教の創始者である**釈尊**（釈迦牟尼世尊）は、「**生者病死**」という根源的な苦悩を解決し得る、「胸中に具わる宇宙と生命を貫く究極の法」である妙法に目覚める。それゆえ、釈尊は『ブッダ』と呼ばれるようになったのである。

釈尊の教えは、口伝で傳承され、やがて幾世紀にわたり整理され、まとめ上げられる。『法華経』は、釈尊の本意である「**万人の成仏**」を実現する最も根本の教えを説いた經典である。やがて、『法華経』は中国で幾度となく漢語に翻訳され、5世紀に**鳩摩羅什**が翻訳した『**妙法蓮華経**』が優れた名訳として広く流布することとなる。

中国の**天台大師**・日本の**伝教大師**は、法華経に対する注釈書を著して、諸經典の中で法華経が卓越していることを明かし、それぞれの文化土壌の中で、法華経の根本目的である、「人間の無限の尊厳性」の開花が図られ、発展的に繼承・実践されて、日蓮大聖人の仏法に結実していったのである。大聖人は『顛仏未來記』で、「安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて**三国四師**と号く（御書509頁）と仰せになっている。

法華経には、釈尊が説いている法華経そのものの他に、過去の仏たちが説いた法華経がある。それらは説かれている教えには種々の違いがあるが、**成仏**のための極理は一つで、それらすべてが法華経なのである。

大聖人は、釈尊の『**法華経**』二十八品、天台大師の『**摩訶止観**』、大聖人御自身の『**南無妙法蓮華経**』を、いずれも**成仏**の根本法を示すものであるととらえられている。したがって、それぞれ**正法**時代の法華経、「**像法**」時代の法華経、「**末法**」時代の法華経と戸田先生は位置付けられて、『三種の法華経』と呼ばれている。

法華経は、二度の「**靈鷲山**」と「**虚空**」で説法されたことから、「**二処三会**」という。

序品 第一 前**靈鷲山会**では、**迹門**の中心となる、『**諸法実相**』『**方便品**』第二

方便品 第二で説かれている『**諸法実相**』とは、『**諸法**』（現実世界におけるすべての現象Ⅱものごと）と**実相**（「真実のすがた・究極の真理」）とが別々のものではなく、「**諸法**」はそのまま**実相**の現れであり、

信解品 第四 **授記品** 第五 **化城喻品** 第七 **五百弟子受記品** 第八 **授学無学人記品** 第九 **法師品** 第十

迹 門

見宝塔品 第十一
提婆達多品 第十二
勸持品 第十三
安樂行品 第十四

妙法蓮華経のすがたなり（御書1358頁）と。

すなわち、『**諸法実相**』が説かれたことよって、十界の衆生そのものが、本質的にすべて**妙法蓮華経**（**諸法**）として平等であることが示されている。

さらに、『**方便品**』では「衆生に仏知見を開かせ・示し・悟らせ、仏知見を得る道に入らせる（法華経167頁）」——万民の生命に平等に具わる仏知見（仏の智慧の境涯を開かせ、それに基づく実践を行って、一切衆生を**成仏**させて、仏自身と等しい仏の境涯に到達させること）**如我等無異**」こそ仏たちの**出世の本懐**であると説かれている。

続いて、**譬喻品**第三から**人記品**第九では、法華経以外の諸経で明かされた声聞・縁覚や菩薩の覚りを得るための三つの教え**三乗**は、法華経で明かされた**成仏**のための教え**一乗**へ導くための方便であることを、『法華経の七譬』のうち、「三車火宅の譬え」（**譬喻品**第三）、「長者窮子の譬え」（**信解品**第四）、「三草二木の譬え」（**藥草喻品**第五）を用いて、**開三顯一**が示されている。

そして、**法師品**第十では、釈尊滅後の惡世**猶多怨嫉 況滅度後**において、だが**法華経**を弘通して衆生を救うのか、というテーマのもと説法の場合は**虚空会**へと展開していくのである。

虚空会

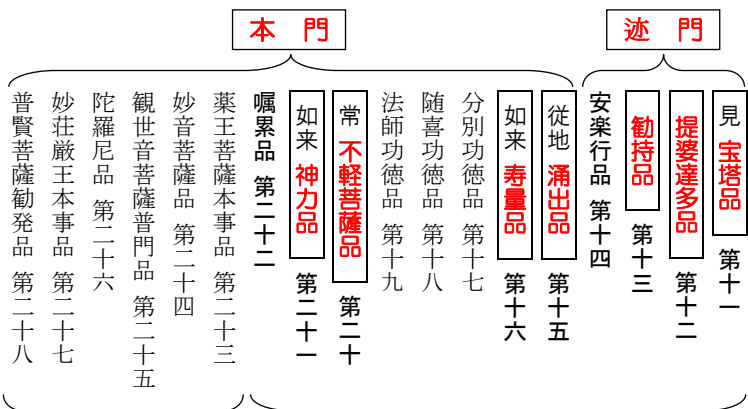
前 靈鷲山会

本 門

藥王菩薩本事品 第二十三
妙音菩薩品 第二十四
觀世音菩薩普門品 第二十五
陀羅尼品 第二十六
妙莊嚴王本事品 第二十七
普賢菩薩勸發品 第二十八

後 靈鷲山会

『法華經』について述べた次の文中の□にあてはまる言葉を書きなさい。



七宝で飾られた巨大な宝塔が出現し、虚空（空中）に浮かび、宝塔中の多宝如来が**多宝の証明**を行う。十方の世界（全宇宙）から、一切の仏・菩薩が集集し、釈尊が宝塔の中で多宝如来と並んで座る（**二仏並座**）。

靈鷲山の聴衆も仏の神通力によって、虚空に浮かび、**虚空**での説法が始まる。釈尊の滅後の弘教の難しさを**六難九易**をもつて説き、菩薩たちへ弘教の決意を促すのである。**宝塔品 第十一**

そして、**提婆達多**の成仏**惡人成仏**と竜女の成仏**女人成仏**を明かす。**提婆達多品 第十二**

やがて、惡世で法華經を弘通する者を迫害する**三類の強敵**を恐れずに弘教することを菩薩たちが誓う。**勸持品 第十三**

続いて、摂受の修業として、身・口・意・誓願の四安樂行を説く。大聖人は『御義口伝』で、「妙法蓮華經を安樂に行ぜむ事末法に於て今日蓮等の類いの修行は妙法蓮華經を修行するに難来るを以て安樂と意得可きなり（御書750p）」——妙法蓮華經を安樂に行ずるということは、末法において御本尊を信じ、自行化他にわたる仏道修行を励めば、必ず難が起きてくる。このことが、実は安樂であると意得なければいけない——と仰せである。（安樂行品第十四）

仏の滅後の弘教の許しを請う菩薩たちを釈尊が制止すると、**四菩薩**

上行菩薩・無辺行菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩を上首とす

る無數の**地涌の菩薩**【たちが大地（迹門）を割って、**虚空**（本地）へと湧き出てくる。彼らは久遠の昔から、釈尊に教化されており、**釈尊**と同じ仏としての境涯を具えているのである。】**涌出品 第十五**

いよいよ、釈尊が**開近顯遠**を明かす。法華經迹門までは、釈尊が過去世に仏道修行を積み重ねた結果、その功德の報いとして初めて成仏した**始成正覺**とされていたが、五百塵点却という、はるか昔の久遠に成仏していたこと**久遠実成**を明かす。ほとんど無限に等しい長遠な時間は、仏界の生命が常住であり、永遠であることを示していく。菩薩としての寿命が永続している釈尊は、一旦は方便として入滅する**方便現涅槃**を説き、入滅してもなお永遠の仏は、九界の凡夫たちが住む

娑婆世界に常住しており、衆生が身命を惜しまず仏道に励むなら、いつでも姿を示すと説き、**娑婆世界**こそが永遠の仏の住む**常寂光土**である**娑婆即寂光**と明かす。**壽量品 第十六**

釈尊滅後に法華經を受持し弘通する功德の素晴らしさを語る。（分別功德品第十七）法師功德品第十九）**釈尊**自身も過去世に**不輕菩薩**として、慢心の人々から杖で襲いかかれたり、石を投げられたりするなどの迫害にあつても、忍耐強く、礼拝行を貫き通すことで成仏したことを、『**二十四文字の法華經**』《我深敬汝等 不敢輕慢 所以者何 汝等皆行菩薩道 当得作仏（我れは深く汝等を敬い、敢て輕慢せず。所以は何ん、汝等は皆な菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし）》（法華經567p）をもつて説く。ここには、万人の生命には**仏性**が内在しているゆえに、あらゆる人の生命を**敬う**という**法華經**の思想が端的に示されている。

上行菩薩らは、仏の滅後に真実の大法を弘めることを誓い、これを受けて釈尊から滅後の弘教を**付囑**される。この**付囑**の通り、末法の初めに出現し、**妙法蓮華經**を説き示し弘通されたのが**日蓮大聖人**である。この意義から、大聖人御自身こそ**地涌の菩薩**、**上行菩薩**などであり、さらに『諸法実相抄』で、「いかにも今度・信心をいたして**法華經**の行者に」とをり、**日蓮**が一門となりとし給うべし、**日蓮**と同意ならば**地涌の菩薩**たらんか、**地涌の菩薩**にさだまりなば**釈尊**久遠の**弟子**たる事に疑はんや（御書1360p）と仰せのように、大聖人の御精神の通り、広布の実践に励む私たち一人ひとりも、すべて**地涌の菩薩**であり、末法の御本仏・**日蓮大聖人**の直結の弟子なのである。

そうして、一切の**付囑**の儀式である**虚空會**の儀式の幕が閉じる。釈尊滅後の**後の五百歳**に**闍浮提**に法華經を广泛宣传するように促し、藥王・妙音・觀世音・普賢などの菩薩たちや毘沙門天・十羅刹女ら諸天善神が法華經を受持する人々を守護することを誓う。（藥王菩薩本事品第二十三）普賢菩薩勸發品第二十八）

法華蓮の
教学試験発心教材⑦ / 教学講釈(一)へ一念三千へ 解答例
平成29年度 教学部初級試験・青年部教学試験3級 対応版

次の文中の□にあてはまる言葉を書きなさい。

法華經に説かれている一切衆生の□**成仏**の原理を、中国の□**天台大師**が、『**摩訶止観**』の中で、万人が本来的に成仏する要因を具えているということを説いて、万人成仏の理論性を明かしたのが□**一念三千**の法門である。

日蓮大聖人は、凡夫の身をもって、成仏のすがた・ふるまい(仏の境地)を、□**南無妙法蓮華經**の御本尊を顕されることで、万人成仏を理論的に可能にした□**一念三千**の法門を具体的に示されたのである。

「一念とは、我々一人一人の瞬間瞬間の生命のことである。『三千』とは、『諸法』すなわち、すべてのもののこと、あらゆる現象・はたらきをいう。一念に三千の諸法が具わり、一念が三千の諸法に遍く広がることを説いたのが□**一念三千**の法理である。つまり、瞬間瞬間のわが生命に『無限の可能性』が秘められており、自身の一念が変われば自身を取り巻く環境も変わり、つ

いには世界をも変えていけるという希望と変革の原理が□**一念三千**の法理である。

この法理の意義を端的に表現しているのが、「二人の人間における偉大な□**人間革命**」は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」である。これは、池田先生の小説『人間革命』の主題である。

大聖人は「観心本尊抄」で、□**一念三千**について示した□**天台大師**の『**摩訶止観**』を次のように引用されている。

「心には十界が具わっている。それぞれの一界に、さらに十界が具わっているので、百界となる。そして、その一界に三十種の世間が具わっているので、百界には、すなわち三千種の世間が具わっている。この三千種の世間は、一念の心にある。もし心が無ければそれまでのことであるが、たとえわずかも心があるなら、そこに三千種の世間が具わるのである」(通解・御書238頁) わずかも我々の「一念の心」があるところ、□**三千種の世間**が具わるということが示されている。

「三千」とは、十界互具と十如是、そして三世間を合わせて総合したものである。〈百界×十如是×三世間＝三千〉

十界と十如是と三世間という、それぞれ異なった角度から生命とその因果の法則をとらえた法理を総合し、我々の生命と世界の全体観を示したものが□**一念三千**である。

大聖人は、「□**一念三千**」は十界互具よりことはじまれり(同189頁)、「□**一念三千**」は九界即仏界・仏界即九界と談ず(同256頁)と仰せのように、十界互具は□**一念三千**の中核の原理となる。

法華經以外の經典では、十界〔**地獄界**・**餓鬼界**・**畜生界**・**修羅界**・**人界**・**天界**・**声聞界**・**縁覺界**・**菩薩界**・**仏界**〕はある界から他の界に移れるのは、死後、来世で生まれる時であるとされ、それぞれの生命が固定された境涯であったが、法華經では、仏界を除く九界の衆生に仏界が具わっていることを説き、また逆に、仏にも九界が具わることを明かすのである。このように、十界の各々の生命に十界が具わっていることを、□**十界互具**という。

これは、仏と九界の衆生がともに十界を具えており、本質的に平等であることを明かし、どのような生命の境涯にある衆生でも、正しい縁に応じて仏界を現し、成仏できることを示しているのである。

そして、我々が日々誦誦している法華經方便品第二に、仏が覺つた「諸法実相」について次のように示されている。

「唯仏と仏のみ乃し能く諸法の実相を究尽したまえり。所謂諸法の、□**如是相**・□**如是性**・□**如是体**・□**如是力**・□**如是作**・□**如是因**・□**如是縁**・□**如是果**・□**如是報**・□**如是本末究竟等**なり」(法華經108頁)

諸法実相を把握する「如是」の「な」で始まる10の項目を□**十如是**と呼び、生命境涯の因果の法則を示している。

相	…表面に現れて絶え間なく移り変わる形・様相
性	…内にあって一貫している性質・性分
体	…「相」と「性」を具えた主体

(事物の本体部分)

力	…内在している力・潜在的能力
作	…内在している力が外界に現れ、他にもはたらきかける作用
因	…内在していて、結果を生み出す直接的原因
縁	…外から「因」にはたらきかけ、結果へと導く補助的原因
果	…「因」に「縁」が結合(和合)して内面に生じた目に見えない結果
報	…その「果」が時や縁に応じて外に現れ出た報い
本末究竟等	…これ以外の九つの如是が一貫性を保っている

生命が変化していく因果の法則を示す

また、先の「三千種の世間」の「世間」とは、差異・違いのことを意味し、十界それぞれの違いは、三つの次元に現れる。衆生はその生命境涯に十界の違いがある。これを□**衆生世間**という。

仏教では、この衆生の構成要素の意味として五陰を考へ、あらゆる衆生は五陰が集まって仮に成立したものであって、常に變化しており、実体はないとされている。十界の衆生の違いは、その構成要素である五陰(色・受・想・行・識)にもある。

「色陰」とは、生命体を構成する物質的側面。□**受陰**とは、知覚器官である六根(眼根・耳根・鼻根・舌根・身根・意根)を通して外界を受け入れる知覚のはたらき。□**想陰**とは、受け入れたものを心に思い浮かべるはたらき。□**行陰**とは、想

陰に基づいて思い浮かべたものを行為へと結びつけ、意志や欲求などのさまざまな心の作用。□**識陰**とは、認識・識別するはたらきをいい、このような五陰における十界の違いを□**五陰世間**という。

また、衆生の十界の生命境涯の違いに応じて、住する国土・環境にも十界の違いがある。これを□**国土世間**という。

次の文中の□にあてはまる言葉を答えなさい。

日蓮大聖人は、「此の御本尊全く余所に求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり」(御書124頁)と、仰せである。

あらゆる仏を仏たらしめている根源の法そのものを、**南無妙法蓮華經**であると明かされ、この根源の法と一体となった大聖人御自身の御生命を、**南無妙法蓮華經**の**御本尊**に顕されたのである。

我々は、この**南無妙法蓮華經**の**御本尊**を信受することで、だれもが自らの生命に**仏界**を涌现することができるといのが、大聖人の成仏觀である。法華經以外の諸經では、**成仏**を説いていても、一乘(**声聞**・**縁覺**)・悪人・女人や、何度も何度も生死を繰り返して仏道修行を行い、**凡夫**(九界)の境涯を脱して仏の境涯に到達されないと、**成仏**することはできないとされていたのである。これら法華經以外の諸經では、**十界互具**・**一念三千**の法理が明かされていないために、**九界**と仏界は相いれないものとされていたのである。

それに対して、法華經では**十界互具**が示されることにより、**成仏**とは**「仏**という特別な存在に成る」ことではなく、自身の九界の身に**「**仏界**の生命境涯を開く」ことであると説いたのである。**

大聖人は「御義口伝」において、「我等が頭は妙なり喉は法なり胸は蓮なり胎は華なり足は経なり此の五尺の身妙法蓮華經の五字なり、此の大事を釈迦如来・四十余年の間隱密したもうなり今經の時説き出したもう此の大事を説かんが為に仏は出世したもう我等が一身の妙法五字なりと開仏知見する時・即身成仏するなり」(同716頁)とも、仰せである。

また、「日蓮が**たましひ**を**すみ**にそめながして・**かきて**候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は**法華經**なり日蓮が・**たましひ**は**南無妙法蓮華經**に・すぎたるはなし」(同1124頁)と仰せになられている。

御本尊は、根源の妙法である**南無妙法蓮華經**を自身のうちに覺知して、開き顕し、体得された大聖人の仏の生命境涯(仏界)を顕されたものである。

南無妙法蓮華經の**御本尊**を、大聖人は、法華經の**虚空会**の儀式を用いて、曼荼羅として顕された。

虚空会は、多宝如来の**宝塔**が出現し、虚空に浮かぶ**宝塔品**第十一から、**宝塔**が閉じられる**囑累品**第十二までにわたる。その核心は、**久遠の仏**であるという本地を明かした釈尊が、久遠の弟子である**地涌の菩薩**を呼び出し、自身の滅後の惡世に**法華經**を広めて人々を救い導くことを託すこと(**付囑**)である。これは、**涌出品**第十五から**囑累品**第二十二までの八品に説れており、**南無妙法蓮華經**の**御本尊**は、この**付囑**の儀式を模して表現されているのである。大聖人は女性門下のお手紙の中に、「竜樹天親等・天台妙楽等だにも顕し給はざる大曼荼羅を・末法二百余年の比はじめて法華弘通のはたじるとして顕し奉るなり、是全く日蓮が自作にあらず……：されば首題の五字は中央にかかり・天王は宝塔の四方に坐し・釈迦多宝・本化の四菩薩肩を並べ……：総じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人ももれず、此の御本尊の中に住し給い妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申すなり」(同1243頁)と仰せであるように、御本尊の中央に認められた**南無妙法蓮華經**は虚空会の**宝塔**を模しており、**虚空会**における**釈尊**・**多宝**如来や上行菩薩などの**地涌の菩薩**は、本来的に私たちの生命に具わる**仏界**や**菩薩界**を示したものであると拝される。

虚空会には、声聞や諸天善神や、その他の衆生も集っている。ゆえに、**御本尊**には、十界の衆生の代表が記されているのである。

このように、**御本尊**には、私たちの生命の十界・森羅万象が欠けることなく円満に具わっており(**輪円具足**)、十界の優れた特性が集まっている(**功德聚**)ことを示している。しかも、**十界具足**の曼荼羅である**御本尊**は、**一念三千**の法門の中核の原理である**十界互具**の法理を、端的に示しており、**天台大師**が「**摩訶止観**」で説き示した**一念三千**の法門は、**万人成仏**の理論的な可能性を明かしたに過ぎず、理の上のものである。

これに対して、大聖人が**凡夫**の御自身の身に開かれた仏の境地を直ちに顕された**御本尊**は、**一念三千**を具体的に示したものであるので、**事の一念三千**と拝す。

さらに、先の御文中の「法華弘通のはたじるとし」のように、**御本尊**は、**付囑**での儀式の意義も示されているのである。我々が、大聖人御自身の身に開き顕された妙法・仏界が御図顕された**御本尊**を信じ拝する時、我々自身に具わる妙法・仏界を直ちに見ることになる、**南無妙法蓮華經**の**御本尊**は、大聖人が万人に**仏界**が具わるとい**法華經**の経文上に説かれた教を深く掘り下げて、**文底**に沈められていた**成仏**の根源の法そのものを直ちに説き示し、我々が現実に成仏するために実践できるよう、具体的に確立されたものである。**御本尊**は、凡夫の我々自身の**仏界**を現実に映し出す

明鏡でもあるのである。

御本尊への信を広げていくことが、そのまま、**法華弘通**、すなわち**妙法**の**広宣流布**の道を開いていくことになるのである。

次の文中の□にあてはまる言葉を答えなさい。

法華経では、一切衆生に仏知見(仏の智慧と慈悲の境涯)が本来的に具わっていることを明かし、一切衆生に仏知見を開かせることが、この世に仏が出現する唯一最高の目的であると説かれている。

そのための主たる仏道修行として、「定」すなわち、心を開いていく瞑想が行われ、とりわけ、經典に説かれた法理をもとに瞑想して自身の心を見つめていくという、「**観心**」が成仏するための修行とされていた。

天台大師 は、自己の心を深くみつめていくことで、自己の心に十界が具わっていることを知り、さらに**十界互具**を理解した上で、自己の一念(瞬の心)に三千の諸法が具備していることを覚知するという、**一念三千**の法門での**観心**の修行を説く。**天台大師** は**観心**の準備として、いくつもの段階にわたる種々の修行を体系的に説くのだが、これには優れた能力と大変な努力が必要となり、現実には極めて困難な修行のため、実際に覚りに到達する者は極めてまれであった。

そこで、大聖人は、どのような人でも実践し成仏できる方法を探究され、**南無妙法蓮華経**の**御本尊**を信じ、**受持**して**題目**を唱えていくことを説かれるのである。

南無妙法蓮華経 は、あらゆる仏が成仏する時に覚知した根源の法であり、十界というさまざまな生命境涯のはたらきを生み出す根本である。**南無妙法蓮華経**の**御本尊**は、**十界互具**という万人の生命の真実を表しているのである。

観心とは、自分自身の心を見つめることである。「観心本尊抄」には、「問うて曰く出処既に之を聞く観心の心如何、答えて曰く観心とは我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」(御書240頁)と仰せである。

このように、我々が**御本尊**を信じて拝すれば、我々自身に具わる十界をみることになる。これまでの成仏のための修行は、**観心**によって行っていたが、日蓮仏法では、**南無妙法蓮華経**の**受持**によってなされる、**受持即観心**である。

さらに、同抄において、「**釈尊**の**因行**」**果報**の二法は**妙法蓮華経**の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」(同246頁)と述べられており、釈尊が成仏するために積んだ膨大な修行(因行)と、修行によって得られたさまざまな功德(果報)のすべてが、仏種である「**妙法蓮華経**」の五字に具わっているということである。釈尊が成仏するために積んだ膨大な修行と修行によって得られたさまざまな功德による「仏としての境地」は、久遠の昔から釈尊に教化された**地涌の菩薩**へと受け継がれ(涌出品 第十五)、釈尊の滅後の悪世の弘通を、**地涌の菩薩**へ託すのである(神力品 第二十一)。

地涌の菩薩は、滅後弘通を勧める釈尊に応えて、成仏の肝要の法を、人々に教え広めることを**誓願**する。師匠である久遠の仏の**大願**をわが心として、継承し、実現しようとする、師弟不二の広宣流布の**大願**である。釈尊は、その**誓願**を受けて、妙法流布を託したのである。

法華経**寿命品**第十六の最後に示された「仏は常に、どのようにすれば、衆生を無上の道に入らせ、速やかに仏の身を成就させることができるかと念じている」(趣意 法華経493頁)は、常にそして、永遠に人々を救っていききたいという慈悲の**大願**である。これを大聖人は、「**毎自作是念**」の悲願(御書466頁)と仰せである。

法華経の付嘱の通り、滅後の中でも**悪世末法**に出現して、**南無妙法蓮華経**を万人に説き、**不惜身命**で弘通された方こそ、**日蓮大聖人** 御自身であることは明確である。

神力品 第二十一には、末法の弘通を託された**上行菩薩**ら**地涌の菩薩**が、現実世界で人々の闇を照らす太陽や月であると説かれ、さらに**涌出品**第十五では、世間という泥の中にあつて、煩惱に煩わされることなく、清らかな覚りの華を開き、実をならせる蓮華であると説いている。大聖人は、これら太陽・月と蓮華の役割を担う**上行菩薩**のはたらきを發揮させるべく、自ら「**日蓮**」と名乗られて、**法華経の行者**として民衆救済の行動を貫かれたものと拝することができ

る。大聖人は、外面の姿やはたらき(外用)においては、釈尊から付嘱を受けた、**地涌の菩薩**の之首である**上行菩薩**であり、内心の覚りの境涯(内証)においては、久遠元初の自受用報身如来である。

「久遠元初」とは、我々の実践に即していえば、凡夫が妙法を自身の生命に開き顕す根源的な成仏の時を意味し、我々が**南無妙法蓮華経**の**御本尊**を信じ、自身の内なる妙法を開き顕すことは、自身に**久遠元初**の仏の境涯を顕すことである。**久遠元初**の仏とは、生命それ自身が持つ尊厳性、人格の価値をそのまま發揮した仏である。「自受用報身」の、自受用(身)とは、「ほしいままに受け用いる身」、**報身**とは、智慧を具え功德の果法に満ちた仏の身のことである。

すなわち、「凡夫自身が、実は永遠にして根源的な妙法そのものである」と覚知する智慧をもつとともに、妙法の無限の功德を自ら受け自在に用いる仏の身なのである。大聖人は、根源の仏の生命境涯を**法華経**の**虚空会**の儀式を借りて曼荼羅に顕し、末法の人々が信じ受持すべき**御本尊**として御図顕された。

我々は、**御本尊**を手本・鏡として拝し、自身が妙法そのものであると信じて**南無妙法蓮華経**と唱え、他の人々に教え広めていく時、わが生命の妙法を現し仏の境涯を開いてその功德を受けることができるのである。

次の文中の□にあてはまる言葉を答えなさい。

「生死一大事血脈抄」において、「総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して**異体同心**にして

南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば

広宣流布の**大願**も叶うべき者か」(御書1337頁)との御文を通して、池田先生は、「**師弟**の精神が脈打つ確固たる

『**異体同心**の**和合僧**』がなければ、仏と魔との戦いである『末法の**広宣流布**』に勝ち抜くことはできません。……

異体同心の**和合僧**があれば『**広宣流布**の**大願**も叶うべき者か』です」(生死一大事血脈抄講義132頁～139頁)と。

さらに、「**異体同心**の核心は、自身の心を、仏の心、**広宣流布**の指導者の心である広布大願に合わせていく

『**師弟不二**の信心』にあります。**日興上人**は**師弟不二**を貫き、『大聖人直結』の**和合僧**団を築かれました。反対に、

五老僧は、権力を恐れ、**師弟**を忘れてしまったがゆえに、**広宣流布**の大道から外れてしまった。まさしく師敵対とは、

異体異心そのものです」(同142頁)と、指導されている。

万人が**妙法蓮華經**の当体であり、**成仏**の血脈を受け継ぐことができる。それを実現していくのが、**広宣流布**とい

う仏の**大願**である。そして、この広布**大願**を実現していく主体が『**異体同心**の信心』で結びついた**和合僧**団なの

である。したがって、この**和合僧**を破ること『**破和合僧**』が、**五逆罪**という、仏法上の大罪に当たるのである。

五逆罪には他に、父を殺す・母を殺す・阿羅漢を殺す・仏身より血を出す、がある。

この大罪を犯しているのが日顕宗である。日顕宗は、『**法主**信仰・神秘的**血脈観**』の邪義を打ち立てるだけでなく、

『**僧俗**差別・化儀の悪用・「腐敗墮落」となっていた。日顕宗の教義が、一切の対話を拒絶して独善化を進める、**法主**を

信仰の対象としているがゆえに、現宗門を「日顕宗」と呼んでいる。御本尊をお護りする役割の**法主**が、いわば、尊極の法そ

のものの体である御本尊と同等の地位までのし上がる教義である。

日興上人は、「唯御書の意に任せて妙法蓮華經の五字を以て本尊と為す可しと即ち御自筆の本尊是なり」(御書1606頁)と

述べられている。「御本尊根本の信心」こそが、日蓮大聖人・日興上人以来の正しい信心の在り方である。

「日興遺誠置文」には、次のように記されている。(同1617頁～1619頁)

一、時の貫首為りと雖も仏法に相違して己義を構えば之を用う可からざる事

一、衆議為りと雖も仏法に相違有らば貫首之を擯く可き事

一、先師の如く予が化儀も聖僧為る可し、

但し時の貫首或は習字の仁に於ては設い一旦の矯犯有りと雖も衆徒に差置く可き事

これらの御文に照らしても、**法主**を絶対視することは、大聖人・日興上人に完全に違背した教義であることは明白である。

法主が絶対であるとする日顕宗は、前提となる**血脈観**に誤りがあるからである。前の法主から次の法主へ、「血脈相

承」を受けるだけで、仏の内証法体が伝わりとする、神秘的な**血脈観**のことである。日顕宗の「能化文書」(宗門の機関紙、大日

蓮に掲載された文書)には、「唯授一人の血脈法水は、まさに人法一箇の法体です」などと記している。このような特権的、神秘的

な**血脈観**は、「生死一大事血脈抄」の御文の「信心の**血脈**」という**血脈**の本義から大きく逸脱した邪義なのである。

さらに、「日本国的一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る**血脈**を継がしめん」(同1337頁)との御文において、池田先生

は、「これは、大聖人御自身の大闘争の御生涯を貫く『御本仏のお心』の核心を示されていると拝されます。……『万人に成仏の

血脈を継がせてあげたい』という大聖人のお心を拝察するうえで、第一に重要な点は、仏法の**血脈**は『万人に開かれてい

る』ということ。この**血脈**の本義は、どれほど強調しても、強調しすぎることはないと言えるほど重要なことです。な

ぜならば、この**血脈**の本義を弁えるか否かが、『人間主義の世界宗教』と『権威主義の邪宗門』とを分ける分水嶺とも言えるか

らです」(生死一大事血脈抄講義150頁～152頁)と、指導されている。

日顕および日顕宗の僧侶に共通しているのは、「僧が上で信者は下」という信徒に対する『**差別**』思想が染みついているこ

とである。この**信徒蔑視**の思想は、日蓮仏法には存在しないのである。日顕宗が、**僧俗**の平等を真つ向から否定する背

景には、江戸時代の檀家制度により、日本の仏教が葬式仏教化したことがあげられる。

大聖人は、「此の世の中の**男女僧尼**は嫌うべからず法華經を持たせ、給う人は一切衆生のしうとこそ仏は御らん候らめ」(御

書1143頁)、「僧も俗も尼も女も一句をも人にかたらん人は如来の使と見えたり」(同1148頁)と、明確に**僧俗**の平等を説か

れているのである。現在、宗門が行っているような**僧侶**による葬儀、法要、戒名などの化儀は、大聖人御自身が定められたも

のではなく、のちの時代に作られたものにすぎないのに、宗門は、**僧侶**による**葬儀**が成仏のために不可欠であると主張

している。大聖人は、むしろ「亡くなった御尊父は、存命中に**南無妙法蓮華經**と唱えたのであるから、**即身成仏**の人な

のである」(通解Ⅱ同1423頁)等と仰せである。また、**僧侶**の在り方について、大聖人は、「ただ正法に対して素直で、少欲知

足である僧こそが、真実の僧である」(通解Ⅱ同1056頁)と仰せである。さらに、こうした仏法利用の悪僧について、「法師の皮を

著たる**畜生**」(同1386頁)、「**食法****餓鬼**」(同1111頁)と厳しく破折されているのである。

法華經の構成・概要

迹門——『始成正覺』を顕す

本門——『久遠実成』を明かす

(前)靈鷲山会

虚空会

(後)靈鷲山会

序品第一	一巻
方便品第二	二巻
譬喩品第三	三巻
信解品第四	四巻
藥草喩品第五	
授記品第六	
化城喩品第七	
五百弟子受記品第八	
授學無學人記品第九	
法師品第十	
見宝塔品第十一	
提婆達多品第十二	
勸持品第十三	
安樂行品第十四	
從地涌出品第十五	
如來壽量品第十六	
分別功德品第十七	
隨喜功德品第十八	
法師功德品第十九	
常不輕菩薩品第二十	
如來神力品第二十一	
囑累品第二十二	
藥王菩薩本事品第二十三	
妙音菩薩品第二十四	
觀世音菩薩普門品第二十五	
陀羅尼品第二十六	
妙莊嚴王本事品第二十七	
普賢菩薩勸發品第二十八	

序品…靈鷲山の会座に大衆が集まり、釈尊がさまざまな瑞相を現ずる。

方便品…説法開始。諸法実相・十如是の法理が示され、また一乗の教えを説くことが仏の出世の本懐であることが明かされる。【諸法実相と二乗作仏】

譬喩品…法理を領解した舍利弗への授記。理解できない弟子のため、『三車火宅の譬え』*を用いて説法する。

信解品…四大声聞〈須菩提(しゅぼだい)・迦旃延(かせんねん)・迦葉・目連〉が領解した旨を『長者窮子(ぐうじ)の譬え』*として示す。

藥草品…四大声聞の領解を承認。『三草二木の譬え』*を用いて、仏の慈悲が平等であることを説く。

授記品…四大声聞への授記。

化城品…三千塵点劫という昔、大通智勝仏の16番目の王子(釈尊の過去世の姿)から化導されたのが在世の衆生であることが説かれる。『化城宝処の譬え』*。

受記品…富楼那(ふるな)への授記。さらに授記を得た五百人の弟子が歡喜して『衣裏珠(えりじゅ)の譬え』*を述べる。

人記品…阿難、羅睺羅(らごら)をはじめ、学(学ぶべきことが残っている者)・無学(学ぶべきことが残っていない者)二千人の弟子に授記。

法師品…法華經の弘通者(法師)、五種の妙行(受持・読・誦・解説(げせつ)・書写)と弘通の方軌(衣座室の三軌)を明かす。【猶多怨嫉・況滅度後】

宝塔品…宝塔が出現し、多宝如来が、釈尊の説法は真実であることを保証する(多宝の証明)。虚空会の説法の開始。【六難九易】

提婆達多品…提婆達多への授記(悪人成仏)と竜女の即身成仏(女人成仏)が説かれる。

勸持品…菩薩による滅後弘通の誓い。「二十行の偈」で三類の強敵を示し、仏滅後の弘通者が必ず迫害を受けることを説く。【三類の強敵】

安樂行品…初信の行者のために身・口・意・誓願の四安樂行という摂受の修行を示す。『譬中明珠(けちゅうみょうじゅ)の譬え』*。

※ 法華經七譬(しちひ)

涌出品…地涌の菩薩の出現。弥勒(みろく)菩薩の問いに対し、釈尊が、久遠の昔から教化してきた弟子であると説く。【地涌の菩薩】

寿量品…“久遠五百塵点劫に成道(じょうどう)して以来、娑婆世界で衆生を教化してきた仏である”と釈尊の本地を明かす。『良医病子の譬え』*で説明。【久遠実成】

分別功德品…法華經の功德について、在世の四信と滅後の五品があることを示す。

隨喜功德品…五十展転(てんでん)の功德を説いて、滅後に法華經を広めることを勧める。

法師功德品…滅後弘通の法師が六根清淨(しょうじょう)の功德を受けることを説いて、法華經の弘通を勧める。

不輕品…釈尊の過去世の姿である常不輕菩薩が万人を敬う礼拝行を實踐して罪障消滅の功德を得たことを説く。【不輕菩薩】

神力品…地涌の菩薩が滅後の弘通を誓った時、釈尊が十神力を示し、滅後の弘通を上行菩薩をはじめとする地涌の菩薩に託す(別付囑)。【地涌の菩薩】

囑累品…全ての菩薩に付囑(総付囑)。十方の諸仏が本土に帰り、虚空会での説法が終了する。

藥王品…藥王菩薩の過去世を通して滅後弘通の功德を示し、十喩(じゅうゆ)を述べて法華經が諸經に対して第一であることを強調。釈尊滅後の広宣流布を予言する。

妙音品…妙音菩薩が三十四身を現じて妙法を弘通し、衆生を教化することを説く。

普門品…觀世音菩薩が三十三身を現じて衆生を教化することを示し、法華經の弘通を勧める。

陀羅尼品…藥王菩薩、勇施(ゆうせ)菩薩、毘沙門天、持国天、十羅刹女が神呪を説き、法華經の行者の守護を仏に誓う。

妙莊嚴王品…妙莊嚴王を夫人と息子たちが正法に帰依させた話を通し、法華經弘通の功德を示す。

勸発品…普賢菩薩が法華經の行者と法を守護するとの誓願を立てる。法華經の説法が終了し、会座の大衆は歡喜して去る。

参考資料 2月度「御書講義」の参考 佐渡御書

一切の障魔を打ち破る弟子に！

〔背景〕

本抄は、文永9年（1272年）3月、日蓮大聖人が51歳の時、流罪地の佐渡から門下一同に与えられたお手紙です。

前年の「竜の口の法難」以降、迫害の手は大聖人だけでなく門下にも及び、弟子たちは投獄・所領没収などに処されました。その中で、「大聖人が法華經の行者であるなら、なぜ大難に遭うのか」等の疑念を抱き、厳しい迫害を恐れ退転する者が続出したのです。

難に動揺する弟子たちを案じられた大聖人は、文永9年2月、御自身が末法の御本仏であることを示された「開目抄」を門下一同に送っています。

この2月には「二月騒動（北条一族の内乱）」が起きましたが、これは「立正安国論」で予言された「自界叛逆難」の中を意味します。「佐渡御書」は、その知らせを受けて著されたものであり、本抄は「開目抄」の趣旨を要約して示された御抄とも拝されます。

〔大意〕

本抄では、人間にとって無上の宝である生命を仏法にささげれば必ず仏になれると教えられ、その実践は時代によって異なることを示されます。

中でも、悪王と悪僧が結託して、正法の行者を迫害する末法においては、「師子王の心」で悪と戦い抜く人が必ず仏になる、と述べられています。

また、自界叛逆難の的中という厳然たる事実から、大聖人こそ日本人の人々にとって「主師親の三徳」を具えた存在であり、大聖人を迫害する者が滅亡の報いを受けるのは、法華經の經文に照らして明らかであると断言されています。

さらに、御自身の法難の意味を洞察され、法難を受けることによつて、過去世からの罪業を滅することができるといふ、宿命転換の原理を示されます。

そして、大聖人に対する退転者の、愚かな批判を一蹴されるとともに、彼らが念仏者よりも長く無間地獄に堕ちると弟子を厳しく戒められ、本抄を結ばれています。

不惜身命——一人立つ信心が成仏の要諦

「佐渡御書」の冒頭部分は、「世間に人の恐るる者は火災の中と刀剣の影と此身の死するとなるべし」（御書956頁）との一節から始まっています。死を恐れ、命を惜しむのは、生きる者の常です。だからこそ、かけがえない自分の命を、人生でどのように使うかが重要になってきます。

日蓮大聖人は本抄の前段で、法華經藥王品の一節を挙げられ、「この大宇宙に敷き詰められるほど多くの財宝を供養するよりも、手の小指を法華經に供養することには及ばない」と述べられています。すなわち、身命を仏法にささげることが、どれほど素晴らしいことなのかを示されているのです。

さらに、釈尊の過去世の姿である雪山童子や樂法梵志が、仏法のために大切な自身の身命をささげたことを通して、不惜身命こそが仏道修行を成就させる成仏の肝要であると仰せです。

ここでいう「不惜身命」とは、決して命を粗末にすることではありません。全生命を懸ける覚悟で真剣に信心に励んでいくことです。

大聖人は「世間の浅き事には身命を失ひても大事の仏法などには捨てる事難し故に仏になる人もなかるべし」（同96）と、「世間の浅き事」のために自分の身を滅ぼすのではなく、「大事の仏法」のために身命をささげてこそ、仏になることができると強調されています。

池田先生は、「私たちにとつて『不惜身命』とは、恐れなく南無妙法蓮華經を唱え抜くことであり、世界のため、未来のため、人々のために、懸命に信心の実証を示しきつていくこと」と、つづられています。

大聖人は「佐渡御書」を通して、所領没収や投獄、追放などの難を恐れる門下たちに、「今こそ成仏のチャンスである」と、不惜身命の覚悟を促されているのです。

師子王の心——「三類の強敵」に敢然と挑む

本抄の御執筆当時、大聖人を見下す諸宗の僧たちが権力者と結託して、大聖人を亡き者にしようとした。

その中にあつて大聖人は、法華經に説かれる通りの「三類の強敵」との闘争に敢然と挑み、乗り越えて、末法の御本仏としての御境涯を示されました。

そのことについて拝読御文では、「畜生の心は弱きをおとし強きをおそる当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり」（御書957頁）と仰せです。

「諛臣」とは、こびへつらう臣下の意味です。大聖人は、政治権力を恐れてこびへつらい、また、物事の道理に暗いために「正義」の人を侮る、諸宗の僧や迫害者たちの本質を「畜生の心」と破折されています。

大聖人が、どこまでも大切にされたのは「法」でした。本抄では、御自身の不惜身命の実践を支える根本精神について、「正法を惜しむ心が強盛だからである」と仰せです。

また、拝読御文で「悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして（同96）とあるように、邪悪の勢力は結託して正義の人を弾圧します。大聖人も、平左衛門尉頼綱らの政治権力と極楽寺良觀ら悪僧の結託によつて、命にも及び迫害を受けましたが、全てを勝ち越えられました。それは「師子王の如くなる心」（同96）があつたからである、と仰せです。

「師子王の如くなる心」とは、百獸の王獅子のように、何もものをも恐れず、どんな状況にも常に全力で挑んでいく「勇氣の心」と拝されます。

悪の結託による迫害の時に、「師子王の心」で立ち上がり、戦い抜く人は必ず仏になると、大聖人は断言されています。

そして「例せば日蓮が如し」（同96）と仰せになり、「師が一切の魔性を打ち破つたように、弟子も「師子王の心」を取り出して、魔を打ち破れ！」、「師と同じ心で戦え！」と呼び掛けられているのです。

摂受・折伏——時機に適った実践こそ重要

拝読御文の最後の部分で大聖人は、「正法は一字一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし千経万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず」（御書957頁）と仰せです。

どこまでも時に適った実践こそ成仏の要諦であり、いかに、膨大な經典や書物を読んでも、時に適った実践がなければ成仏はかなわないと教えられています。

このように本抄では、一貫して「時に適った実践」の重要性が強調されています。

御文の前段で大聖人は、「仏法は摂受・折伏時によるべし」（同96）とも仰せです。「摂受」は、人々の機根に合わせて法を説いていくことであり、「折伏」は、極理の南無妙法蓮華經を説き切っていくことです。

末法では、折伏こそ時に適った実践です。大聖人は、末法において法華經を流布すれば、釈尊在世よりも激しい怨嫉（二敵対、反発）が起り、大難が競い起こることを教えられています。

しかしながら当時、大聖人の門下の中にも、正義ゆえに大難が競い起こることを、受け止められない者がいました。師匠である大聖人が、竜の口の法難、佐渡流罪と、命に及ぶ大難に遭うと、恐れと、師匠への不信を抱くようになっていったのです。

彼らは、「日蓮御房は師匠にしておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべし」（同961頁）と言いだしました。

大聖人はこうした退転の心に覆われた門下を、「螢火が太陽や月を笑い、蟻塚が華山を見下し、井戸や川が大河や海を侮り、鵠が鸞鳳を笑うようなものである」（同961、通解）と、悠然と見下ろされています。

創価三代の師弟は、この大聖人の精神を受け継ぎ、広宣流布にまい進。一切の大難を勝ち越え、厳然と正義の旗を打ち立てました。学会は永遠に「折伏の団体」であり、声も惜しまず、自他共の幸福を広げる対話に率先しているのです。

【参考資料】

◆六難九易／見宝塔品第十一

九つの易しいことは、本来なら大難事ではあるが、仏滅後において法華經を受持する六つの行いの方がはるかに難しいことと説き示している。

諸余經典 數如恒沙	雖說此等	未足為難	①	諸余の經典は 數恒沙の如し	此れ等を説くと雖も	未だ難しと為すに足らず
若接須弥 擲置他方	無數仏土	亦未為難	②	若し須弥を接つて 他方の	無數の仏土に擲け置かんも	亦た未だ難しと為さず
若以足指 動大千界	遠擲他国	亦未為難	③	若し足の指を以て 大千界を動かし	遠く他国に擲げんも	亦た未だ難しと為さず
若立有頂 為衆演說	無量余經	亦未為難	④	若し有頂に立つて 衆の為めに	無量の余經を演說せんも	亦た未だ難しと為さず
若仏滅後 於惡世中	能說此經	是則為難	⑤	若し仏の滅後して 惡世の中に於いて	能く此の經を説かば	是れは則ち難しと為す
仮使有人 手把虛空	而以遊行	亦未為難	⑥	仮使い人有つて 手に虚空を把つて	以て遊行すとも	亦た未だ難しと為さず
於我滅後 若自書持	若使人書	是則為難	⑦	我が滅後に於いて 若しは自らも書き持ち	若しは人をしても書かしめば	是れは則ち難しと為す
若以大地 置足甲上	昇於梵天	亦未為難	⑧	若し大地を以て 足の甲の上に置いて	梵天に昇らんも	亦た未だ難しと為さず
仏滅度後 於惡世中	暫読此經	是則為難	⑨	仏の滅度の後に 惡世の中に於いて	暫くも此の經を読まば	是れは則ち難しと為す
仮使却燒 担負乾草	入中不燒	亦未為難	⑩	仮使い却燒に 乾ける草を担い負いて	中に入つて焼けざらんも	亦た未だ難しと為さず
我滅度後 若持此經	為一人說	是即為難	⑪	我が滅度の後に 若し此の經を持つて	一人の為にも説かば	是れは則ち難しと為す
若持八万 四千法藏	十二部經	為人演說	⑫	若し八万 四千の法藏	十二部經を持つて	人の為めに演說して
令諸聽者 得六神通	雖能如是	亦未為難	⑬	諸の聽かん者をして 六神通を得しめんも	能く是の如くすと雖も	亦た未だ難しと為さず
於我滅後 聽受此經	問其義趣	是則為難	⑭	我が滅後に於いて 此の經を聽受して	其の義趣を問わば	是れ則ち難しと為す
若人說法 令千万億	無量無數	恒沙衆生	⑮	若し人は法を説いて 千万億	無量無數	恒沙の衆生をして
得阿羅漢 具六神通	雖有是益	亦未為難	⑯	阿羅漢を得 六神通を具せしめんも	是の益有りと雖も	亦た未だ難しと為さず
於我滅後 若能奉持	如斯經典	是則為難	⑰	我が滅後に於いて 若し能く	斯の如き經典を奉持せば	是れは則ち難しと為す

〔法華經390頁～392頁〕

《現代語訳》

- ① 多くのそれ以外の經典は、その数がガンジス河の砂のごとく多数ある。これらを説いても、まだ難しいとなすには足りない。
- ② もしも須弥山を取つて、他方の無數の仏国土に、投げ置くことも、まだまだ難しいとはしない。
- ③ もしも足の指をもつて、三千大世界を動かして、それを遠く他国に投げることも、まだまだ難しいとはしない。
- ④ もしも有頂天（宇宙の頂点）に立つて、人々のために、無量のそれ以外の經典を演説しても、まだまだ難しいとはしない。
- ⑤ （けれども）もしも仏の入滅したのちに、惡世に中において、よくこの經を説くことがあるならば、これこそすなわち難しいとするのである。
- ⑥ たとえあるひとが手に虚空をとらえて、そうしてあちらこちら遊行しても、まだまだ難しいとはしない。
- ⑦ （けれども）わたくしが入滅したのち、もしくは必ずから書いて受持し、もしくはひとに書かせるならば、これこそすなわち難しいとするのである。
- ⑧ もしも大地をもつて、足の爪の上に置いて、そのまま、梵天にのぼって行くとしても、まだまだ難しいとはしない。
- ⑨ 仏が入滅したのちに、惡世の中において、暫くでも、この經を読むならば、これこそすなわち難しいとするのである。
- ⑩ たとえ世界の破壊である却のはじめのころに大火災がおつているときに、乾いた草を背中に荷つて行つて、その火の中に入つても焼けないというの、またまだ難しいこととはしない。
- ⑪ わたくしが入滅したあとに、もしもこの經を受持して、一人のためでもこの經を説くならば、これこそすなわち難しいとするのである。
- ⑫ もしも八万四千という仏教全体の教えの蔵と、十二部經とを受持して、ひとのために演説し、
- ⑬ 多くの聴くものに、六神通を獲得させるならば、よくこのようにしたとしても、またまだ難しいとはしない。
- ⑭ わたくしの入滅したのちにおいて、この經を聴いて受持し、その意義趣向を問うならば、これこそすなわち難しいとするのである。
- ⑮ もしもあるひとが法を説いて、千万億の、無量無數で、ガンジス河の砂の数ほど多数の生あるものたちを、
- ⑯ みな聖者の位を得て、六神通をそなえさせるならば、その利益はそれだけあるとはいつても、またまだ難しいとはしない。
- ⑰ わたくしが入滅したあとにおいて、もしもよく、このような經典を受持し尊ぶならば、これこそすなわち難しいとするのである。

【参考資料】

◆三類の強敵く勸持品第十三『二十行の偈』

末法悪世の時代に、法華経を弘める者には必ず「三類の強敵」が出現することが示されている。

1 唯願不為慮 於仏滅度後 恐怖惡世中 我等當広説
有諸無智人 惡口罵詈等 及加刀杖者 我等皆當忍
惡世中比丘 邪智心詔曲 未得謂為得 我慢心充滿
或有阿練若 納衣在空閑 自謂行真道 輕賤人間者
貪著利養故 与白衣說法 為世所恭敬 如六通羅漢
是人懷惡心 常念世俗事 仮名阿練若 好出我等過
而作如是言 此諸比丘等 為貪利養故 説外道論議
自作此經典 誑惑世間人 為求名聞故 分別説是經
常在大眾中 欲毀我等故 向國王大臣 婆羅門居士
及余比丘衆 誹謗説我惡 謂是邪見人 説外道論議
我等敬仏故 悉忍是諸惡 為斯所輕言 汝等皆是仏
如此輕慢言 皆當忍受之 濁却惡世中 多有諸恐怖
惡鬼入其身 罵詈毀辱我 我等敬信仏 當著忍辱鎧
為説是經故 忍此諸難事 我不愛身命 但惜無上道
我等於來世 護持仏所嘱 濁世惡比丘 濁世惡比丘
不知仏方便 隨宜所說法 惡口而嘯聲 數數見擯出
遠離於塔寺 如是等衆惡 念仏告勸故 皆當忍是事
諸聚落城邑 其有求法者 我皆到其所 説仏所嘱法
我是世尊使 如衆無所畏 我當善說法 願仏安穩住
我於世尊前 諸來十方仏 発如是誓言 仏自知我心

《現代語訳》

20 唯だ願わくは慮いゝを為したまわれ 仏の滅度の後 恐怖惡世の中に於いて 我れ等は當に広く説くべし
19 有る諸の無智の人の 惡口罵詈等し 及び刀杖を加うる者有らん 我れ等は皆當に忍ぶべし
18 惡世の中の比丘は 邪智にして心詔曲に 未だ得ざるを謂いて得たりと為し 我慢の心充滿せん
17 或は阿練若に 納衣にして空閑に在つて 自ら眞の道を行ずと謂いて 人間を輕賤する者有らん
16 利養に貪著するが故に 白衣の与めに法を説いて 世の恭敬する所と為ること 六通の羅漢の如くならん
15 是の人は惡心を懷き 常に世俗の事を念ひ 名を阿練若に仮つて 好んで我れ等が過を出さん
14 而も是の如き言を作さん 此の諸の比丘等は 利養を食らうが為めの故に 外道の論議を説く
13 自ら此の經典を作つて 世間の人を誑惑す 名聞を求めんが為めの故に 分別して是の經を説くと
12 常に大眾の中に在つて 我れ等を毀らんと欲するが故に 國王大臣 婆羅門居士
11 及び余の比丘衆に向つて 誹謗して我が惡を説いて 是れ邪見の人 外道の論議を説くと謂わん
10 我れ等は仏を敬うが故に 悉く是の諸惡を忍ばん 斯れの輕しめて 汝等は皆な是れ仏なりと言う所と為らん
9 此の如き輕慢の言を 皆當に忍んで之を受くべし 濁却惡世の中には 多く諸の恐怖有らん
8 惡鬼其の身に入つて 我れを罵詈毀辱せん 我れ等は仏を 敬信して 當に忍辱の鎧を着るべし
7 是の經を説かんが為めの故に 此の諸の難事を忍ばん 我れは身命を愛せず 但無上道を惜しむ
6 我れ等は來世に於いて 仏の嘱する所を護持せん 世尊は自ら當に知しめすべし 濁世の惡比丘は
5 仏の方便 宜しきに隨つて説きたまふ所の法を知らず 惡口して嘯聲し 數數擯出せられ
4 塔寺を遠離せん 是の如き等の衆惡をも 仏の告勸を念うが故に 皆當に是の事を忍ぶべし
3 諸の聚落城邑に 其れ法を求むる者有らば 我れ皆な其の所に到つて 仏の嘱する所の法を説かん
2 我れは是れ世尊の使なり 衆に処するに畏る所無し 我れは當に善く法を説くべし 願わくは仏よ安穩に住し
1 我れ世尊の前 諸の來りたまえる十方の仏に於いて 是の如き誓言を發す 仏は自ら我が心を知しめせ

(法華經417頁〜421頁)

① ただ願わくは御心配なさいませんように。仏が入滅されてから後、恐ろしい怖れのある惡世の中に於いて、我らは當に広く説くであらう。

② 多くの無知の人が惡口をいい、罵り及び刀杖を加える者があらうとも、我らは皆當にそれを忍ぶであらう。〔第一類 俗衆増上慢〕

③ 惡世の中の比丘は、まちがった智をもつていて、心にひい諂へつらいがあり、まだ〔第二類 道門増上慢〕

得ていないものを、すでにこれを得たと思ひ、我執の心が充滿しているであらう。

④ あるいは山林の静かな場所、ボロ切れを継ぎ接ぎした衣を着て、誰もいないところにいて、自ら眞実の道を行じていると思つて、人間を輕んじ賤しめて

いる者があるであらう。

⑤ 財産を貪り自己の利益を求めることに貪著しているが故に、在家の人々のために法を説いて、世間から恭敬されること、六神通を得た阿羅漢(聖者)

の如くであらう。

⑥ この人が惡心を懷いて、常に世俗のことばかり心にいつも思ひ、その名前のついで、山林の静かな場所に住んでいるということをやよりでうにして、我らの

過失を数えあげてことを好んでいる。

⑦ しかもこのような言葉をいう、「この多くの比丘たちは、財産を貪り、自己の利益を求めることに貪著しているがために、外道の論議を説き、

自らこの經典を作成して、世間の人を誑たぶらかし惑わせ、名聞を求めようとするがための故、分別してこの經を説くのである」と。

⑧ このように常に大勢の人々の中で、我らをそしろうと欲するので、國王・大臣・バラモン・在家の人々、

⑨ 及びその他の比丘たちに向つて、我らを非難して惡口をいい、我らの惡を説いて、「我らはまちがった考えの人である。外道の論議を説いている」といふ

⑩ 我らは仏を敬いたてまつるが故に、悉くこの多くの惡を忍ぶのであらう。彼らの為に輕んぜられて、「汝らは皆これ仏なのだ」といわれても、

⑪ このような輕蔑した高慢な言葉を、皆當に我らはじつと忍耐して受けるであらう。濁りに満ちた却という惡世の中には、多くの恐ろしい怖れがあるであらう。

⑫ 惡鬼がその身の中に入つたような人は、我を罵り、そしり辱めるであらうけれども、我らは仏を敬い信じたてまつるによつて、必ず當に忍耐の鎧を

身につけるであらう。

⑬ この經を説かんがための故に、この多くの困難なことがらに耐え忍ぼう。我は一身の命を愛するのではなく、ただ無上の仏道だけを惜しんでいるので

⑭ ある。

⑮ 我らは來世に於いて、仏に委嘱されたところを護持しよう。世尊は自ら當に御存知であらう。濁りに満ちた世の悪い比丘は、

⑯ 仏が教化の方法として、ふさわしいように相手に応じて説かれる法を知らないで、惡口をいい眉を蹙(しかめ)、經を受持する者がしばしば追放されて、

⑰ 塔や寺から遠く離れさせられてしまふ。

⑱ このような多くの惡をも、仏の御告げをじつと心に思うが故に、皆當にこれらのことがらを忍ぼう。

⑲ 多くの聚落や城市に、もしも法を求める者があるならば、我らは皆そのところに到り、仏に委嘱された法を説く。

⑳ 我は世尊の使者であるから、多くの人々に対処しても畏れることはない。我は當に善く法を説く。願わくは仏よ、安穩にとどまつておられますように。